

「創業者・市村清物語」は、今号より装いを新たに、「人となり」シリーズをスタートします。市村の好きなものは？ 交友関係は？ 性格は？…さまざまな視点から市村の人物像に迫っていきます。意外な一面にもご期待ください。

テレビにくぎ付けで大鵬に夢中

今年に入り、新横綱稀勢の里、新大関高安の誕生で、大相撲人気は盛り上がりを見せています。

時代をさかのぼること50有余年。子供の好きなものを並べた「巨人・大鵬・卵焼き」という流行語も出たくらい横綱大鵬の人気は絶大で、まさに時代のヒーローでした。そもそも市村は大の大相撲好きで、以前は横綱として人気を博していた千代の山をひいきにしており、よく升席で観戦していました。その後、大鵬の大ファンとなり、本場所中は、大相撲中継の時間になるとそわそわし始めます。外出先から飛んで帰って来て、社長室に入るなり、「すぐテレビをつける」と命じることもしばしばでした。

市村付きの運転手は、市村を待つ間、カラジオで中継を聞いて、勝敗をすべてメモしていました。「おい、大鵬は今日はどうした？ 勝ったかい？」、これが市村の第一声でした。

市村は大鵬後援会の副会長も引き受け、人一倍の熱心さで激励し続けたのです。

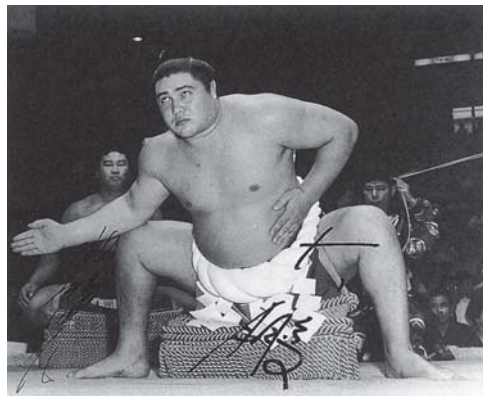
こんな関係から大鵬さんと市村の交流が始まったわけですが、やがて大鵬さんは、市村の生き方に尊敬の念を抱くように

なっただけです。

市村の一周忌に際して、大鵬さんは、「結婚し、家を建てた時、市村さんの仕事と住居という関係に一つの感慨を得た」と語っています。

大森馬込にある市村さんのお宅には幾度かお訪ねしたが、2年前の初夏、自分が家庭をもったときに、妻といっしょにごあいさつに伺ったのが最後になった。

環状7号線のあの辺りは、数百メートルにわたってリコー本社が軒を並べ、あたかも「リコー通り」の感があるが、市村さんのお宅は、本社と道を挟んで反対側の小高い丘の上に建てられていた。氏の幅広い事業の本拠地の下真ん中にご自分の住居を持たれていたのである。自分の事業場と住居をこんなに近く持つていられる産業界人は恐らくないであろう。(中略) ある日は思いすごしかもしれないが、相撲という天職と生活とが全く一致しなければ生きられぬ世界に己れを賭けている自分が、一軒の家をもつ段になってみて、ふと思いがたが市村さんの生き方の一面であった。へわしじやとて情や涙は知らぬじゃない人が呼ぶ呼ぶ土俵の鬼と (中略)



横綱時代の大鵬関 (『三愛会会誌』125号より)

自分の好きな音頭の一節であるが、こんな勝負の世界のきびしさも、市村さんなら身をもって体験された苦節からわかっていてくれたのではないか。あの方は文字通りの仕事の鬼であった。

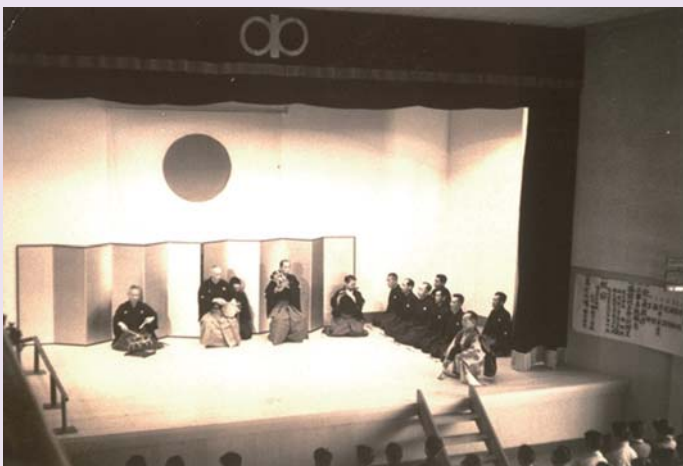
(『Sanaai 59号 市村清追悼号』より抜粋)

大鵬さんは1940年、樺太生まれ。大変貧しい子供時代を過ごし、定時制高校を中退して相撲部屋に入門。初土俵からわずか5年で横綱に昇進しました。

その人生は、貧農の家に生まれ、さまざまな苦難を乗り越えてきた市村の人生と重なります。こんなところにも、互いの絆を強めたゆえんがあったのかもしれない。

市村清フォトアルバム

このコーナーでは、これまでなかなか登場する機会のなかった市村の写真を取り上げ、知られざる一面をご紹介します。



『理研光学工業本社大森ホール落成式』趣味の一つであった謡曲を披露する市村清 (右端)

1958・4・1